



Title	戦後における京都発信の建築家：富家宏泰とその作品について
Author(s)	富家，大器
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

戦後における京都発信の建築家 富家宏泰とその作品について

富家 大器 京都美術工芸大学

建築家・富家宏泰とはだれか

とみいえひろやす
富家宏泰（1919-2007）は、香川生まれ、京都大学卒業後、戦後京都を拠点に設計活動を開始、代表作に京都府立資料館、府立文化芸術会館、石川県立美術館、三重県立美術館などその生涯を通じ約 2000 点余の作品リストを有する日本有数の建築家の一人でもあり、戦後の京都を形成した建築家と言っても過言ではない。しかし、こうした日本の近現代建築史上非常に重要な人物とその作品群でもあるにも関わらず、現代において京都の建築家として認識されているとは言い難い。またその作品はほとんど紹介されておらず、業績は未だ解明されていない。

富家宏泰研究の目的

近年、モダニズム建築を見直す動きが盛んになりつつあり、京都でも「モダン建築の京都」などの大規模な展覧会やシンポジウム等が開催されている。しかし、そういった動きは端緒についたばかりで、地元の建築家が取り組んだ作品に対する着眼や評価には至っていない。前述のように、戦後昭和期の京都において重要な活躍をした富家宏泰の作品研究を進めることにより、今後、戦後の京都における建築史の欠落したピースを埋めていくことができ、その全貌を俯瞰することにつながるものとする。

富家宏泰研究の先行事例

2022 年時点で富家宏泰の作品研究を行った例はごくわずかである。京都工芸繊維大学教授の中川

理による論考として「実践としてのモダニズム——建築家・富家宏泰の活動を通じて考える」（美術フォーラム 21 12 2005・醍醐書房）他が確認されている。その他、図書館建築のプランニング変遷に迫った渡辺透の研究「建築家・富家宏泰の図書館建築における空間構成の年代的变化と意匠的特徴に関する研究」（大阪工業大学大学院博士課程 ロボティクス&デザイン工学研究科博士前期課程論文 2019）そして筆者富家大器の「建築家・富家宏泰の石川における業績」（京都美術工芸大学 研究紀要第二号 2021）等が主要なものとなっているのみである。

富家宏泰の建築作品における背景要因

京都大学建築学科に入学してすぐ第二次世界大戦が勃発したが、終戦後復学、京大講師を経て 1952 年 10 月に独立、京都で設計事務所を開いている。京大時代に師事したのは棚橋諒、森田慶一の両氏であった。天才構造学者棚橋からは構造のダイナミズムを、文学に造詣の深かった森田からは空間のリリズムを受け継いでいるといえる。また、学外でも漆芸家の初瀬川柳庵をはじめとする工芸作家たちとの交流から、京都らしい和風＝茶室や数寄屋建築へのまなざしの確かさと真髓を叩き込まれた。師譲りの構造的なモダンと合理性そして抒情性、京都の歴史や粋を理解し、老獪な経営者たちとわたりあっていける知識や審美眼を兼ねた素地に、戦地で生き延び鍛えた精神力。そして背景としての高度成長経済は、こういった富家のパーソナリティを強く後押ししていった。

創業後しばらくは苦難の時代を耐えたが、1950年代の終わりから1960年代初頭にかけて、京都観世会館や第二日赤病院、府立総合資料館、市立体育館、京都新聞本社、京都商工会議所、ワコール本社、ヤサカタクシー本社、大日本スクリーン本社などの作品を相次いで手掛け、やがて名実ともに京都を代表する建築家に育つまでには時間はかからなかった。これら背景には戦後復興と高度成長という背景があったにせよ、政財界こそって「京都で建築を頼むなら富家に依頼しよう」といった現象と気運が醸成されたことは特筆に値する。

建築作品の特徴

その作風は一貫して表現に溺れることのない、機能や構造に率直なモダニズムだといえる。そして建物としての主張はあくまでも「控え目」。ただし、初期と後期では微妙にデザインの表層的傾向は若干異なっている。

初期の「ヤサカタクシー」（1959）に代表されるようなバウハウス直系、モダニズムのお手本のような実直な作品に加え、京都市立体育館（1961）そして京都府立資料館（1961）のように骨太の構造を率直に表した作品が多いが、のちに石川県立図書館（1963）のような金属格子の繊細さを兼ね備えたものも見られるようになる。

大屋根の表現は1967年のカトリック河原町教会あたりから顕著に見られるようになる。京都らしい景観要素として特徴的なデザインを取り入れたものだが、この表現は1969年の府立文化芸術会館に発展していく。建築としての実直さに加え、この辺りから、きめ細かなデザインの系譜が出現。のちの石川県立美術館や三重県立美術館などの作品へと受け継がれていった。

また、府立総合資料館、京都府警本部、京都商工会議所、石川県立図書館などでは、敷地条件が許す限り、京町家の構成にも通じる豊かな中庭を配置している。その後も合理性を重視したオフィスビルや工場等を手掛けるとともに市歴史資料館

や裏千家センター、御所西平安ホテル等、の作品では、四角い箱だけではない屋根やファサード等の表情に、建築としての豊かさ、京都のまちに溶け込む工夫を感じさせる例も多い。これらを景観法以前の京都でいち早く独自に導入した事実の特筆に値する。

建築メディアにではなく、施主に寄り添う

このように大規模な作品も手掛けている反面、ごく小規模な住宅も終生得意とした。メディアへの興味を失ってはいたが、1964年、作家の谷崎潤一郎氏から依頼された湯河原の家「湘碧山房」は、氏のいわゆる「陰影礼賛的世界」とは異なり、ごく明るい部屋を配したものであった。この衝撃の事実をここで詳細に述べる余裕はなく、項を改めるが、老年の谷崎氏は実は暗い空間に興味を失っていたのだった。そして富家はその施主の要求を叶えた。単なる自己主張をするのでも、言いなりになるのでもなく、クライアントの希望に寄り添いながら、より高次元で満足度の高い設計を行うという姿勢は、今日でも通用する建築家像のあり方の一つだと解釈できる。

展覧会継続開催と今後の展開について

建物の竣工から長い時間を経た現在、建て替えなどで失われる作品が多くなっており、作品資料の整理等が急務である。建築のアーカイブを取り巻く諸相は今後ますます重要性を増す。保存運動の有無を問わず、失われた図面等の資料を収集していく作業は非常に重要であるにもかかわらず、困難を極めるが、作品展の開催を契機に、研究上非常に有益な機会を得ることも多い。今後作品の多い三重や千葉での展覧会開催の実現化に向けての企画を行い、展覧会開催という独自の研究スタイルを確立する。さらに、昨今発展の目覚ましい3Dデジタルでの映像記録などにも取り組み、アーカイブの可能性を拡げていくことで、研究の解像度を上げる活動を継続して展開する。